

病気でも楽しみたい 海外旅行

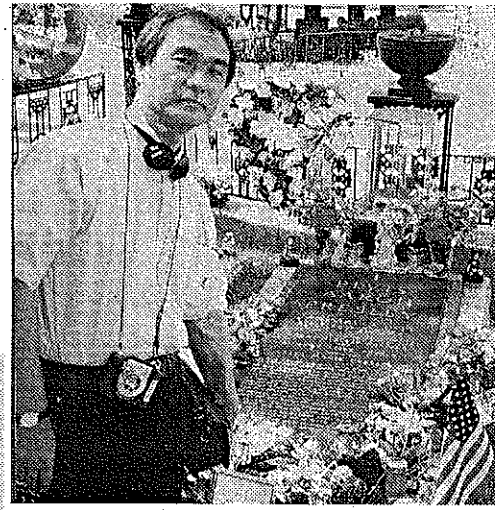
海外旅行での 健康上の注意点

- ①「言葉ができない」と病院に行くのをためらうと手遅れにも。身振りで通じる。脳卒中などが疑われたらすぐ救急車などで近くの専門病院へ
- ②病歴や常用薬、アレルギー情報などを書いた旅行用英文診断書を持っていくと、気後れせず病院にかかれ、より適切な処置を受けられる
- ③自分の病気を勉強し直す。例えば糖尿病なら日常生活の注意点や1日のカロリー摂取量などを確認。必要なら機内食は特別食を予約できる
- ④常用薬は1週間分くらいは余分に持参。飲み慣れた痛み止め薬、風邪薬、整腸剤も3-5日分。それ以上は現地の医師の診断を受ける
- ⑤飛行機に長時間乗ると足の血管に血栓ができやすく、呼吸困難などになることも。水分摂取やトイレなどへ歩くことを心がける

(篠塚規さんの話を基に作成)

主な航空会社の問い合わせ窓口

- ▽日本航空プライオリティ・ゲストセンター (0120・747・707)
- ▽全日空スカイアシストデスク (0120・029・377)
- ▽日本エアシステム予約・案内センター(国内線=0120・511・283、国際線=0120・711・283)



あこがれのプレスリーの麓の前に立つ清水さん(昨年6月、米国テネシー州メンフィスで)

人工透析や酸素吸入が欠かせないなど、これまでなら旅行をあきらめていた病気の人が、最近、元気に海外に出かけています。英文診断書を作るなど医療面でサポートする窓口が登場しているほか、患者専門の団体ツアーも広がっているためです。環境が変わるだけに十分な注意は必要ですが、持病があってもあきらめず旅を楽しむ方法を探してみましよう。

(武中 英夫)

現地と連携サポーター窓口登場

旅先の人工透析手配 英文の診断書作成も

神奈川県横浜市の清水輝幸さん(52)は四年前から腎不全のため週二回、四五時間の人工透析に通っています。でも昨年六月、男(25)と米国のテネシー州メンフィスへ五日間の旅を楽しみました。子供の時からあがれ、歌手エルビス・プレスリーの元邸宅がある町です。「病氣

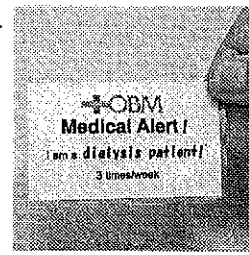
であきらめていたのに。まさか長年の夢がかなうなんて」旅行中、人工透析は現地のホテル近くの施設で受けました。探して予約をしてくれたのは海外旅行の医療支援サービス会社「オプベイスメディカ」(東京03・5414・7100)。透析に必要なデータなどを英文に訳した上、

旅行会社も患者の旅行手配に乗り出しています。近畿日本ツーリストのバリアフリー旅行センター(東京03・5323・6915)は人工透析の施設紹介、糖尿病の特別食手配などを実施。JTBトラベルネットデスク(03・3321・7600)もハワイでの透析を受け付けています。

昨年発足した「あえる倶楽部」(東京03・57721000)はハルパー同行サービスも実施。肺機能障害のある横浜市の中井吉彦さん(79)は昨夏、ヘルパーを同行し酸素吸入器を付けハワイを訪れました。手数料やサービスなどは各旅行会社で異なるのでよく確認しましょう。

現地の医師と事前に連絡も取っておいでました。同社は昨年から本格的にサービスを開始。人工透析のほか、肺気腫などで在宅酸素療法を受けようとする患者の酸素ボンベ手配、脳卒中患者のリハビリ施設の紹介など様々な病気を抱える人の海外旅行をサポートしています。料金は例えば人工透析の予約なら基本的に五千五百円(税別)です。持病などのある人が海外で急に具合が悪くなった時に備え同社では、病歴や常用薬の成分名などを書いた旅行用英文診断書も作成しています。

持病を持つ中高年の旅行者が増えているため、各旅行会社でつくる日本旅行業協会(東京)も今年一月、専門家による「旅と健康」に関する調査研究プロジェクトを発足対策に乗り出しました。「オプベイスメディカ」代表で国際旅行医学会正会員でもある医師篠塚規さんは「持病があってもあきらめず旅を楽しんで」と強調、そのための海外旅行中の注意点を表に挙げています。



「私は透析患者です。週3回(透析が必要)」と書かれた英文カードを、清水さんは持参した。心臓ペースメーカー患者なども持ち歩く安心だ

やさしい介護